

## 【ふせる】

だれが云ったか忘れたけれども、「伏せる」という字は、人に犬だから、犬が伏せると人になり、人が伏せると犬になる。

ぼくは伏せることがかなり多いほうだとはおもうけれども、犬になったことはないから、この話は眉唾（まゆつば）だとかんがえていたのですが、かんがえをあらためなければいけなくなりそうです。

とても天気の良い日曜日、小学校の校庭で、ひなたぼっこをしていると、いつのまにか村びとたちに取り囲まれています。

「この犬、どうすべえか」

「犬鍋は、どうじゃろか」

なんてことを云っています。

そうか、もしかするとぼくは、寝ころんでいたのではなく、伏せていたのかも知れない、とおもって、ぶるぶるふるえました。

「犬鍋がこわくて、ふるえているぜ」

「そんなこと、犬にわかるもんかい」

なんてことを云っています。

犬だって、たいていのことは解るもんだと、このとき初めて知りました。

「せっかく犬鍋やっても、この犬じゃ不味そうだ」

「村長は犬好きだから、売れるかもしれん」

なんてことを云っています。

村長は、本当は犬好きではなく、猫好きだということを知らないらしい。

「村長はけちだから、一文もださんじゃろ」

「ならば、食うしかあるまいて」

なんてことを云っています。

不味そうだが、売れないから食うしかないとは、村びとたちも貧しいな。

「食う食ういうとったら、この犬食い付きそうだぜ」

「狂犬病だったら、やばいなあ」

なんてことを云っています。

なるほど、狂犬病を装えば身を守れるかも。

いざとなったら、そうしよう。

「殺すと化けて出そうだから、飢え死にするのを待つか」

「とりあえず囲いを作って、逃げられないようにすべ」  
なんてことを云っています。  
そうして囲いを作るための木材を集め始めました。  
このぶんでは、狂犬病を装っても駄目だ。

「犬の分際で、睨んでやがる」  
「犬畜生のくせに、生意気な犬じゃな」  
なんてことを云っています。  
犬の身になってみると、人間というものは、ずいぶん、横柄で陰険で冷酷なものだ、と解ります。  
それと、人間というものは本来、「虐め」とか「差別」とかをするようにできているんだ、と気づきます。

「ぼちぼち夕暮れになるなあ」  
「そうになったら、遠吠えで仲間を呼ぶかもしれんぜ」  
なんてことを云っています。  
犬と狼が、ごっちゃになっているんじゃないかな。  
そうになると、もう冷静な判断ができないから恐ろしい。  
何をされるか解らないとおもうと、またぶるぶるふるえました。

「犬畜生め、何をするかわからんぞ」  
「いまのうちに逃げておこうか」  
なんてことを云っています。  
そうして、一人逃げ出すと、一人ずつ逃げ出して、校庭が闇に包まれ、変な風が吹き出すころには、いつのまにかだれもいなくなりました。  
なるほど、人間は、他人と同じことをしたがる習性があるのか、とおもわれました。

伏せていたぼくが起き上がると、人間に戻っていました。  
この日は、学校での一年分くらいの勉強をしました。